

西朋25

西朋登高会

西朋 2 5

西朋登高会

—目次—

山行総覧	3
山行記録	
1990年度	7
1991年度	19
1992年度	31
西高ワングル部活動報告	37
西朋登高会会則	39

1990年度 山行総覧

山行No	期 日	山 行 名	パ ー テ イ
9001	4 / 6 ~ 7	幕岩 / FCT	額賀、他1
9002	13 ~ 15	頸城 / ST : 燕尾根 ~ 火打山 ~ 笹ヶ峰	上野、額賀、高橋
9003	29	鷹取山 / FCT	額賀、他1
9004	5 / 2 ~ 5	八甲田山 / 新人合宿 ST : 大岳 ~ 猿倉岳 ~ 櫛ヶ峰 ~ 乗鞍岳 ~ 猿倉温泉	上野、額賀、高橋
9005	12 ~ 13	南会津 : 会津駒ヶ岳	青谷、他1
9006	13	奥武蔵 / FCT : 日和田山	額賀、他1
9007	20	奥武蔵 / RCT : 日和田山	上野、額賀、内倉、高橋 緒方、栗原、清水
9008	26 ~ 28	南アルプス / VR : 北岳パットレス第4尾根 ~ 北岳	上野、額賀、他1
9009	6 / 3	丹沢 : 塔ノ岳	清水、他5
9010	16 ~ 17	奥秩父 / WC : 丹波川・小常木谷	上野、高橋、栗原、清水
9011	24	奥武蔵 / WC : 浦山川・大神楽沢左俣 ~ 冠岩沢下降	青谷、上野、額賀
9012	7 / 1	南大菩薩 / WC : 笹子川・滝子沢左俣 ~ 滝子山	高橋
9013	8	奥多摩 / WC : 盆堀川・桐葉窪	高橋
9014	14 ~ 15	奥秩父 / WC : 滝川・滝川本流 ~ 水晶谷 ~ 水晶山	上野、高橋
9015	8 / 8 ~ 14	日高山脈 / 夏合宿 WC : ペテガリ岳 ~ キムクシュベツ川下降	青谷、吉田、山田、高橋
9016	12	谷川連峰 / WC : 仙ノ倉谷・ダイコンオロシ沢 ~ イイ沢下降	上野
9017	16 ~ 17	利尻島 : 利尻岳	高橋
9018	22 ~ 28	南アルプス : 黒戸尾根 ~ 甲斐駒ヶ岳 ~ 仙丈岳 ~ 北岳	栗原、清水
-	9 / 1	奥多摩 / 西朋祭 : 氷川キャンプ場	
9019	2	奥多摩 / WC : 小川谷・犬麦谷	吉田、高橋
9020	15 ~ 16	谷川連峰 / WC : 魚野川・荒沢本谷 ~ 柄沢山	上野、高橋
9021	29 ~ 30	丹沢 / WC : タライゴヤ沢・ヤゲン沢敗退	上野、高橋
9022	10 / 5 ~ 7	吾妻連峰 / WC : 前川・大滝沢	上野、高橋
9023	19 ~ 23	南アルプス : 塩見岳 ~ 北岳	内倉、中村
9024	20	奥多摩 / WC : 盆堀川・伝名沢 ~ 白杵山	上野
9025	21	丹沢 / WC : 葛葉川本谷 ~ 三ノ塔	高橋
9026	22	奥武蔵 / WC : 浦山川・大神楽沢右俣	青谷
9027	11 / 3 ~ 4	奥秩父 / WC : 大洞川・和名倉沢 ~ 和名倉山	上野、高橋
9028	10 ~ 12	南アルプス / VR : 鋸岳	上野、高橋
9029	23	奥多摩 : 高水三山	清水
9030	12 / 16	八ヶ岳 : 赤岳	上野、高橋
9031	30 ~ 1 / 3	南アルプス / 冬合宿 VR : 聖岳東尾根 ~ 聖岳 ~ 上河内岳	青谷、上野、内倉、高橋、清水
9032	1 / 14	西上州 / IC ~ VR : 南牧川・三段の滝沢 ~ ミドリ岩	青谷、上野
9033	15	裏妙義 / IC : 入山川・北烏帽子沢	青谷、上野
9034	2 / 9 ~ 10	八ヶ岳 / VR : 横岳・石尊稜 ~ 石尊峰	上野、高橋
9035	3 / 22 ~ 24	谷川連峰 / ST : 大源太山 ~ 平標山	吉田、上野、高橋、清水

◎山行形式一覧

- ・ ST - 山スキー
- ・ WC - 沢登り
- ・ VR - バリエーションルート
- ・ RCT - ロッククライミングトレーニング
- ・ FCT - フリークライミングトレーニング

1991年度 山行総覧

山行No	期 日	山 行 名	パ ー テ ィ
9101	4/3~4	安達太良山/ST: 安達太良山~くろがね小屋 ~鉄山~横向温泉	青谷、高橋、清水
9102	13~14	越後山塊/ST: 巻機山	上野、内倉、高橋、清水
9103	27~28	西上州: 両神山	緒方、他4
9104	30~5/4	飯豊連峰/新人合宿ST: 石転び沢~梅花皮小屋 北股岳~飯豊川源頭部下降~石転び沢下降	吉田、上野、内倉、高橋
9105	5/12	奥武蔵/RCT: 日和田山	上野、額賀、栗原、内田、松居
9106	25	富士山/ST	山田、他2
9107	25~26	足尾山脈/WC: 弓ノ手沢~袈裟丸山~下の滝沢下降	
9108	6/9	西丹沢/WC: 中川川・西沢下瀬沢	吉田、上野、清水
9109	15	谷川連峰: 谷川岳	山田、他1
9110	30	丹沢/WC: 寄沢・滝郷沢	上野、額賀
9111	7/13~14	神室連峰/WC大横河中退	吉田、上野、額賀
9112	8/4	南大菩薩/WC: 笹子川・滝子沢左俣	額賀、他1
9113	5	奥武蔵/WC: 細窪谷支流~大平山	青谷
9114	9	北アルプス: 焼岳	緒方、他多
9115	17~22	朝日連峰/夏合宿WC: 三面川・岩井俣沢 ~大朝日岳~竜門山~以東岳~大鳥池	青谷、吉田、上野、額賀、 高橋、清水
9116	20~24	南アルプス: 塩見岳~白峰三山	緒方、他2
9117	31~9/1	富士山	青谷、他1
9118	9/1	谷川連峰/WC: 谷川・ヒツゴ-沢~谷川岳	高橋
9119	1~3	北海道: 雌阿寒岳、斜里岳、羅臼岳	内倉、緒方、他2
9120	22	積丹半島/WC: 伊佐内川~積丹岳	吉田、上野
9121	24	定山溪/WC: 白水川~無意根岳	上野
9122	28~29	奥秩父/WC: 丹波川・小常木谷	額賀、他3
9123	10/19~20	越後山塊/WC: 登川・ヌクビ沢三クラ沢~巻機山	山田、他1
9124	20	頸城: 雨飾山	緒方、他2
9125	11/1~4	飯豊連峰: 飯豊本山、会津磐梯山	内倉、中村
9126	3~4	吾妻連峰: 西吾妻山	額賀、他2
9127	23	奥武蔵/FCT: 日和田山 大ハング左ルート5.10b	額賀、他5
9128	12/7~8	八ヶ岳/VR: 天狗尾根~赤額	上野、高橋
9129	22	八ヶ岳/VR: 阿弥陀岳北稜 : 赤岳北峰リッジ	山田、吉田、高橋 上野、額賀
9130	27~1/5	キリマンジャロ: ウフル・ピーク	青谷
9131	31~1/3	南アルプス/冬合宿VR: 赤石岳~悪沢岳~千枚岳	山田、上野、額賀、高橋
9132	2/17~21	キリマンジャロ: ギルマンズ・ポイント	内倉、他1
9133	2/15~16	八ヶ岳/VR: 赤岳北峰リッジ	山田、他2
9134	3/8~9	志賀高原/ST: 鳥甲山	上野、額賀、高橋
9135	18~20	南紀/VR: 大峰山八徑ヶ岳	額賀、他4
9136	31	谷川連峰/ST: 白毛門山~宝川温泉	青谷、上野

1992年度 山行総覧

山行№	期 日	山 行 名	パ ー テ ィ
9201	4/11・12	守門岳ST	上野、額賀、他1
9202	29~5/1	白神岳~向白神岳ST	吉田、上野
9203	5/2	岩木山ST	吉田、上野
9204	3	岩木山	青谷
9205	3~5	甲武信岳~雁坂峠	緒方、他5
9206	17	日和田山CT	上野、額賀、緒方、栗原
9207	31	丹沢水無川セドノ沢左俣	額賀、他5
9208	6/20・21	奥秩父滝川豆焼沢	額賀、他6
9209	8/8・9	奥秩父ヌク沢	高橋、清野
9210	15・16	南ア小太郎沢	上野、高橋、清野
9211	18~23	南ア荒川三山~上河内岳	緒方
9212	21~23	夏山合宿 北ア前穂高北尾根	山田、高橋
9213	22~25	北ア滝谷クラック尾根	上野、額賀
9214	9/1~5	北ア裏銀座縦走(鳥帽子~笠ヶ岳)	緒方、他4
9215	9・10	恵那山	内倉、緒方、他2
9216	10・11	那須苦土川大沢	青谷、松本
9217	26・27	丹沢エビラ沢	山田、上野、額賀
9218	11/27~29	冬山偵察 北ア唐沢岳北尾根中退	上野、額賀、博多
9219	12/29~1/2	北ア唐沢岳北尾根	上野、額賀、高橋、緒方
9220	1/15・16	戸隠高妻山ST敗退	青谷、上野
9221	2/13・14	八ヶ岳ジョウゴ沢IC	額賀、他13
9222	3/13~15	北ア五竜岳	額賀、他14
9223	27・28	安達良山ST	上野、額賀

1990年度山行記録

会長	遠藤 彰
チーフ・リーダー	青谷知己
学生リーダー	額賀淑郎
	高橋寛和
西高係・記録・会報	内倉昌治
	新倉秀也
会計	上野午良
装備	高橋寛和
都岳連	青谷知己

9004 八甲田山

大岳～猿倉岳～櫛ヶ峰～乗鞍岳 スキーツアー

5/3～5 上野・額賀・高橋

5/3 (晴れ)

今年の連休は山スキーということでさんざん悩んだあげく八甲田にした。今はなき急行「八甲田」で青森へ。バスに乗換えロープウエーと乗り継いで山頂駅へ。ゲレンデスキーヤーが大勢いる中をスキーを担いで赤倉岳を越えて大岳へ向かう。この辺りまで来ると、もう山スキーの領域であり、ゲレンデスキーヤーは皆無である。小岳からの快適な斜面を滑って、高田大岳との鞍部より睡蓮沼に出た。今日はもうひと頑張りして駒ヶ峰への登りの途中で幕営した。

5/4 (曇り-ガス)

朝からどんよりとした曇り。ニセ駒付近で迷うが、駒ヶ峰を越えて櫛ヶ峰との鞍部に幕営する。小休止の後、ガスの中を櫛ヶ峰へアタック。濃霧と小雨の中の山頂はとても寒かった。急いでとって返して幕営地まで戻る。雨の中の腐れ雪のスキーは快適とは言いがたい。夜のテントは湿気と雨で不快感200%だった。

5/5 (ガス濃霧)

今日もガスの中を出発。猿倉岳をトラバース気味に通過して矢櫃沢にかかる橋めがけて滑り下りる。無木立の急斜面で仲々爽快である。橋にザックをデポして乗鞍岳を往復するも、濃霧で展望はなし。下りは適度の木立と斜面で楽しめる。デポ地へ戻り、矢櫃沢左岸の台地状の所をスキーで辿り、猿倉温泉へゴールインした。

北八甲田では快晴、南八甲田では終日ガスであったが、数多くのツアーコースがある華やかな北八甲田よりも、地味ではあるが存在感ある山々が連なる南八甲田に愛着が湧いた
(上野 記)

9008 南ア 北岳バットレス 第四尾根

5/26~28 上野・額賀 他1名

久し振りの岩の本チャンで、何か起こりそうな予感めいたものがあったことは確かである。

5/26 (晴れ)

朝、東京を発ち、甲府からタクシーで広河原へと向かうが、タクシーの運チャンは夜叉神までしか入れないと言う。確かにゲートがあり、そこから先は車が入れないようになっていた。計画段階では広河原まで車で入れると思っていた・・・。下調べ不足でした。

と、同時に「帰りは広河原～夜叉神間の4Pの歩き加わる分、登攀時間が削られるなあ」との杞憂があった。とはいえ、4Pの林道歩きで広河原へ。車が入れないので人影もなく静かなものである。大樺沢沿いの道を行き、途中から雪渓上を行くようになり、バットレス基部手前の雪渓上に幕営する。

5/27 (晴れ)

今日は、登攀後4Pの夜叉神までの林道歩きがあるのでスピーディーに行動せねばならない。登攀具を持ち、6時に出発。3人共バットレスは初めてなのと、残雪が多いのも手伝って、第四尾根基部を見極めるのに一苦労。一本右側の尾根に上がってしまい、1Pのトラバースをしてやっと四尾根に入る。この雪壁上トラバースで、西山君が15m程滑落してヒヤッとしたが、アンザイレンしていたので事なきをえた。四尾根に入ったのはいいものの、これが後で気付くのだが、本来のスタート地点よりも2P程下部ピッチからのスタートだった。幸い天気は良く、日差しが残雪に反射して眩しいくらいである。バットレスに取り付いているのは我々だけであろう。ラバーソールに履きかえて、高度感にビビリながら岩の感触を確かめるように着実に登ってゆく。途中、マッチ箱のホルからは隣の十字クラック、ピラミッドフェースが眺められた。登攀終了後も気は緩められなかった本来、草付である所が急斜面の雪壁となっているのである。アンザイレン4Pでようやく北岳頂上に到着する。もう18時を回っており、日が暮れる寸前である。登攀終了後の充実感がすぐに、早く下りねばというあせりに変わっていた。雪の草すべりコースを、まさしく滑り落ちるように、勢いに任せて幕営地へ下ってゆく。幕営地には20時頃に到着しその時点で、夜叉神まで行かなくては連絡がとれないので、今日中の下山の連絡は無理だ

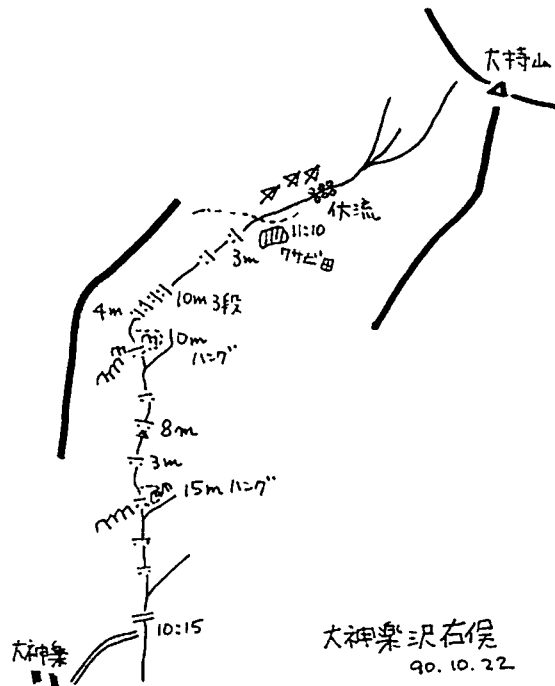
と判断する。テントを撤収して、ヘッドランプを頼りに広河原へと下山する。疲れが見られるが、明るく照らす月夜がガンバレよと見守ってくれているようだ。途中、大樺沢左岸のガレ場の通過に手間取り、広河原到着は午前0時。

5/28 (晴れ)

3人に疲労の色が見られ、少し仮眠をとってから夜叉神へ向かうことも考えたが、一刻も早く連絡することが先決であるのと、この先は林道歩きであるので、ラーメンをすすってあったまってから再度出発する。夜が明け、空が白み始め、最後のトンネルを抜けると、前方にやっと夜叉神の売店が見えた。同時に、2、3人の人影が見え、平日の、しかもこんな朝早くに誰だろうと思ってよく見てみると、見たことのある顔であった。西朋の内倉・中村・新倉・高橋の4氏が、昨日連絡が無いのを受けて様子を見にきてくれたのだまさかこんなに早くに動いてくれているとは。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

計画立案段階での十分な下調べ不足と、例年にもまして残雪が多かったことが、予定を大きく狂わせてしまった。基本的に、夜叉神からの歩きが入る場合は1泊2日では無理があり、この時期は登攀のみで1日とる位の余裕があった方が良くかもしれない。

(上野 記)



9011 9026

秩父 浦山川大神楽沢左俣～冠岩沢下降
右俣～高蔵尾根

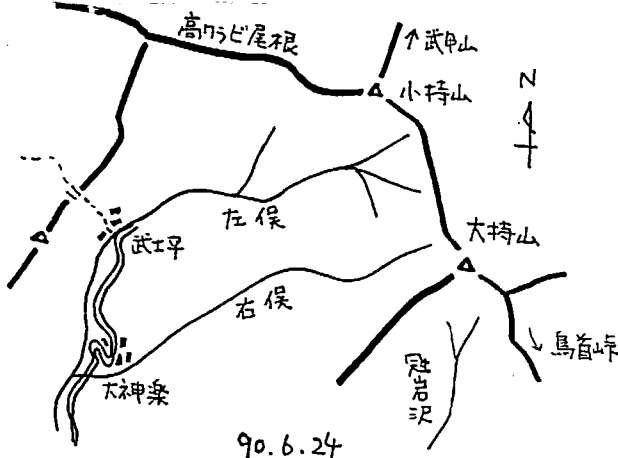
1990. 6. 24 青谷、上野、額賀

昭和34年版の東京付近沢歩きのガイドブックを見ると、大神楽沢本流のルンゼはなかなか面白そうである。そこで、2人を誘って出掛けてみることにした。秩父よりタクシーで武士平まで入る。沢の入り口付近は大崩壊、しばらくゴーロをたどると、小滝も現れてそれらしくなる。途中10mほどの滝を見る。その後は単調な沢筋でやぶもかぶってくる。一旦沢は消えてしまい右往左往する。単独行の人と出会うが、同じガイドを見ていたのにはさらに驚いた。その上は植林帯のゴーロで、ルンゼらしきものは見当たらない。水流のある右の沢をたどると10mのスラブ壁にいき当たる。いよいよと思って期待して取り付く。右壁より巻き上がると、その上はまた平凡な流れにもどってしまった。そして、それでおわり。あのルンゼはみあたらず、物足りなさが残る。大持山を經由して下った鞍部より冠岩沢に下る。この付近では唯一の原生林帯で気持ちが良い。上部では2、3のナメ滝があるが容易。大滝は左岸に踏み跡があり、難無く降りることができた。15m滝を懸垂しており、しばらくして道を見いだして終了。ツキノワ荘に立ち寄り。

10. 22 青谷単独

大神楽集落10:15-ワサビ田11:10-大持山12:20-小持山13:00-(高蔵尾根)-武士平
下降点13:40-14:00-武士平14:40

記録のない、右俣をたどってみた。2つの直登できない大滝、小規模ながらも連瀑帯があり、下部はそこそこ面白い。ワサビ田にであうと植林帯になり、あとは見るべきものはなかった。不安定なクボ状をつめていくと大持山直下になる。この付近は獣の気配も強いところだ。高蔵尾根は、しっかりした踏み跡がついており、困難はない。ただ、尾根上は小灌木が多く、期待した眺望が得られなかったのは残念。



9015 北海道 日高ペテガリ岳～
歴舟川 キムクシュベツ川下降

1990. 8. 8～14 青谷、山田、吉田、高橋

高校時代、五竜遠見尾根の春合宿だったろうか、OBの渡辺さんたちが歌っていた歌にその山の名前があった。Its a long way to Petegali, Its a long way, to go……。遙かなる山ペテガリ岳。まさか行くことになるとは、夢にも思っていなかった。

3年後の今、遅きに失したが、その山行きの記憶の断片をたどってみることにしたい。
(1993. 10記す)

8/8 上野から急行八甲田で出発。

8/9 幾度かの乗り継ぎを経て、日高線の静内に至る。予約のタクシーが待っていてくれた。牧場地帯を抜け、日高の山懐に分けいって行く。途中営林署に寄って登山届けを出した。延々とどった林道、その終点にペテガリ山荘があった。初めての日高、その山深さ、ヒグマの世界、なんとなく緊張が走る。ラジオは、台風の接近を告げていた。この日は、翌日のペテガリ川の偵察をかねて、釣りにでかける。快適な小屋泊まりとなる。

8/9 天気は小雨模様。当初予定していたペテガリ沢は断念し、尾根からペテガリ岳をめざすことにする。登山道下部は、ヒグマ要注意箇所。鈴を鳴らしながら進む。しばらくで尾根らしくなり、視界も開けてくる。何度かの登り下りを経ると、最後の急登である。山脈の上部は霧の中。台風の通過後の強風が容赦なく吹きつける。森林限界を越えた吹きさらしの斜面を一直線にたどると、そこが山頂であった。記念写真と石をひとつ確保、視界のないのが惜しい。早々にCカールへの道をたどる。ハイマツの尾根は左右が切れて、踏み跡も心細い。Cカール底は絶好のテントサイト。モレーンのあちこちから、ナキウサギの音が聞こえてくる。ただ、ブヨの類いの襲来には閉口する。

8/10 いよいよキムクシュの下降の日である。台風一過、快晴。日高の山々がシャープな姿を見せている。カールから流れ出す水流は、いきなり滝となってかけ下って行く。出だしから空中懸垂となる。その下は、ナメ滝の連続。ザイルを出すほどでもないのだが、微妙な下降が続く。広大な斜面を一気に数百m下ると、沢はまとまりを見せはじめる。簡単そうな滝も深い釜をもっており、ザイルをつけての泳ぎ下りとなる。これはこれで面白い。やがて三股につく。ここからいよいよ核心部だ。しばらく穏やかな流れを進むと、兩岸がスラブ状になり、水流は1、2mに圧縮されていく。8の函。果敢に水流に身をまか

せる。部分的に背の立たぬところもあるが、ウォーターシュートのごとく運ばれて、一気に通過する。快也。つづく7の函、6の函も泳いで通過する。しばらくして現れたのが5の函。無気味に澱んだ瀕は30mほど先で右に屈曲して先が見えない。ここは自重して右岸より巻く。気持ち悪いトラバースから、懸垂で瀕の浅瀬に降りる。右岸より支流が滝となって合流し、すばらしい廊下となっている。ここを抜けたところでテントを張る。

8/11 4の函は、中を通過、ここは立って歩けた。3の函はザイルをつけて、右に左にと泳ぎ下る。2、1の函は、知らずのうちに左岸より巻いてしまった。そしてあっけなくヤオロマップ川との合流点。陰悪なキムクシュはすっかり穏やかな流れに姿を変えていた。ここより水流は3倍となり、折からの雨も手伝って、徒渉やへつりは思いの外の困難を強いる。適当なテント場がなく、傾斜した岩の上でのビションレビバークとなってしまった。

8/12 林道まであと2、3時間と覚悟して出発するも、1時間あまりで踏み跡を発見、林道に出る。かなり奥まで伸びたようだ。荷物を投げ出し、着替えを済ませる。あとは林道を歩くだけ。しかし、甘かった。その長いこと。次第に顔が引きつってくる。1時間に6.5kmペースで、5ピッチ。その間、出会った車は1台、エゾシカ1匹。ふもとの牧場を抜け、ようやくたどりついたバス停からは、日高の山々がはるか遠くにかすんで見えるほどだった。

折よく日に3本のバスをつかまえて、帯広に出た。ずっと窓から日高の山並みが見えた。その日は、町中のビジネスホテルに投宿。荷物は全部東京に送って、4人は解散となった。

こう思い返してみると、たしかにペテガリの山頂を踏み、キムクシュの流れに身を任せてきたのだが、その印象はあっさりしたものだ。それは、稜線でゆっくり日高を感じる間もなく下ってきてしまった、物足りなさかもしれない。また、初めての山域の緊張、過剰なヒグマへのおそれが、ゆったり身をまかせるゆとりを失わせていたようにも思う。

いつかまた、遥かなる日高の山々にでかけてみたい、そのときはきっと違った日高を感じることができるだろう。

9 0 1 6 谷川連峰
仙ノ倉谷ダイコンオロシ沢～イ沢下降

8/12 (晴れ) 上野

今年の日高の合宿に、仕事の都合で涙をのんでの不参加となった腹いせをダイコンオロシにぶつけてみた。前夜から土樽駅ビパークをし、仙ノ倉谷の光輝く西ゼン、東ゼンの超ナメを見ながらダイコンオロシを攻めてゆく。つめあげてからは、稜線にそって仙ノ倉山まで行き、縦走路沿いに下ろうかと考えていたが、仙ノ倉山までの踏跡がなくハイマツの猛烈な藪漕ぎとなりそう（もっと捜せば踏跡はあったのかもしれない）だったので、隣のイ沢を下降した。

帰りの電車の中で、心地良い疲れにまかせて夢うつつとなり、「いつかは北海道の沢を」という気持ちで一杯だった。（上野 記）



9 0 2 4 奥多摩 盆堀川伝名沢～臼杵山

10/20 (快晴) 上野

何のキッカケでこのような沢へ、しかも一人で行くことになったのか？ それでも、10m程の滝があり、左壁をやや緊張しながら登ったことを覚えている。あとは小さな流れの中を、クモの巣をはらいながら臼杵山に辿り着いた。（上野 記）



聖岳東尾根～聖岳～上河内岳

12 / 30 ~ 1 / 3 菅谷 上野 内倉 高橋 清水

5 / 30 ~ 31 (晴れ)

最終の新幹線で静岡へ。久々の駅裏のあとタクシーで畑窪ダムへ。ダムサイトで車組と合流。4時間の林道歩きでしごかれた後、とうとう東尾根に取りつく。何名か登山者が入っている様子。白達ノ頭を越えたところで幕営。

1 / 1 (吹雪)

1991年正月は吹雪で停滞。高橋の特製雑煮が唯一の救い。夜は晴れ、静岡の灯が見える。一方では、冬の稲妻も走っており、大気的不安定さを実感する。明日が不安。

1 / 2 (吹雪のち晴れ)

不気味な朝焼け。いきなり山行の核心部だが、ザイルをださずに聖岳山頂に到着する。しかし、山頂はやはり吹雪だった。樹林帯の聖平を越えると再び吹雪かれ、上河内岳の二重稜線でやや道を見失いかける。山頂から下りはじめると、突然視界がひらけ、眩しい太陽が稜線を照らした。降り積もった雪に足をとられながら、日差しに励まされ茶臼小屋に到着。日暮も近かったが、横窪小屋まで下り、長い一日を終えた。

1 / 3 (快晴)

快晴のなか快調に下り、車で赤石温泉ロッジへ向う。窓からは、越えてきた稜線が真っ白に輝いていた。

9032 西上州 ミドリ岩三段の滝、 北鳥帽子沢

1990. 1/14~15 青谷、上野

勸能を経て、3段の滝入り口まで車で入る。日陰には雪がうっすらと積もっているが、冷え込みはもう一步である。装備をつけて3段の滝をめざす。目の前に現れた滝は、1、2段目がかろうじて氷結しているものの、3段目は氷がつかず水流がしぶきをあげている。下部で遊んだ後、ザイルを出して上野トップで直登する。3段目は右手の道から迂回する。この上は見るべきものがないので、ミドリ岩のピークをめざすことにする。左手からまわりこんで稜にとりつく。下部は痩せ尾根だが、快調に高度をかせげる。頂上直下で左手がスッパリ切れ、ナイフリッジになるので、右より回りこむが、草付きまじりのフェースにはばまれる。ザイルを出して登るが、いやらしいピッチだ。ここを越えるとすぐピークだった。一服後、大岩との鞍部めざして踏み跡をたどる。岩場の急下降。降り立つと道もはっきりしてきて、明るい灌木帯の斜面になる。ミドリ岩を仰ぎつつ、3段の滝を経由して車に戻る。

勸能温泉があるはずと捜すが見当たらず、一旦下仁田に下り腹を満たした後、電話帳でみつけた温泉に泊まる。

翌日早々に宿を発ち、裏妙義をめざす。北鳥帽子沢の下部はとりたててみるべきものはない。核心部よりはじまるナメ滝から氷結を見る。これを快適に越えて行くと、2段40mの氷瀑となる。傾斜は緩いが、氷は細く、支点もとれないので緊張する。これを越えるとガレ沢となってしまう。適当なルンゼをつめていくと7人屋付近の稜線にとびだした。鳥帽子岩を経由して大遠見峠へ。並木沢沿いの道を下山した。今年も暖冬の影響で、氷が発達せず、物足りない結果となってしまった。

1991年度山行記録

会長	渡辺喜仁
チーフ・リーダー	青谷知己
学生リーダー	清水直行
西高係	緒方敬士
	栗原潤
会計	上野午良
記録・会報	内倉昌治
	新倉秀也
装備	高橋寛和
都岳連	青谷知己

9101 安達太良山 スキーツアー

1991. 4/3~4 青谷、上野、高橋、清水

二本松からタクシーで岳温泉スキー場にはいる。麓は春の気配、スキー場は名残りのスキーヤーがちらほらと滑っているだけだ。新設のゴンドラは一気に尾根の上部まで我々を運ぶ。あだたら山頂までの距離はグッと短くなった。春の陽気の中、スキーをつけて登り出す。緩やかで広大な斜面、右手のからす谷も快適な斜面になっている。頂上の岩の突起が乳房を思わせる山頂直下には2Pで到着。基部にスキーを置いて頂上を極める。やや風があるものの、磐梯山や吾妻連峰がバッチリ見える。基部からいよいよ滑降だ。遠くの斜面を黒い獣が登って行く。あとで足跡を見たらカモシカであった。くろがね小屋めざし竈山との鞍部をめざす。滑り出しはガリガリだが、しばらくで快適になる。少し登り返すと鞍部。そこから広大な斜面を斜滑降でおおきくトラバース、真っすぐくろがね小屋に滑り込む。ただ雪質は悪く、ひっかかる雪に派手に転倒して足を痛めてしまった。小屋は広々として快適。温泉も入り放題ということなし。晩飯は、高橋君アイデアのチーズフォンデュ、味は?ではありました。

翌日、小屋の前でスキーをつけ、竈山まで昨日のルートを登り返す。鞍部より尾根左の斜面を直登していく。上部で右の尾根に出て稜線に抜ける。天気は快晴で言うことなし。鉄山までは、しばらくスキーを担ぐ。やせ尾根を一旦下降し、正面の岩場は左手より巻いていくと、案外簡単に鉄山の一角にでる。頂上では360度の展望にはしゃぐ。ここからはスキーをつけ、直滑降一発で避難小屋。箕輪山は左からトラバースしていく。さあ、残すはブナ林の大滑降と思われたが、何か雰囲気が違う。何と目の前にスキー場が現れた。いつしかゲレンデに誘い込まれ、一番下まで滑ってしまった。場違いの雰囲気、温泉もないので、リフトにのって戻る。上部より横向スキー場側のブナ林へ。やっとな静かな樹林帯の滑降になる。滑り着いた横向温泉は、ひなびた湯治場でほっとするものがあつた。

9 1 2 0 北海道 積丹半島 伊佐内川～積丹岳

9/22 吉田・上野

吉田氏の北海道出張のついでに沢登りをやろうということになった。私（上野）は9/20（金）の仕事もそそくさと5時定時であがり、そのまま新幹線・特急・フェリーそしてまた特急と乗り継いで遙々北海道へ。札幌駅では吉田氏と当地に勤めている西入氏が迎えに来てくれていた。札幌のデパートで食糧の買い出しをし、西入氏の愛車をお借りして吉田氏と2人で一路積丹へ。小樽・余市を経て積丹海岸沿いのドライブの後、北海道中央バスの「丸山会館前」というバス停の先から伊佐内川沿いの農道へ入って行くが、行き止まり付近まで行ってはみたものの真っ暗で不気味。とって返して、国道沿いの掛屋ともつかぬ小屋で泊まる。

9/22（晴れ）

車を小屋横に置いて出発。放牧されている牛に脅えながら牧場の脇を通り過ぎ、伊佐内川に入る。最初の2Pは浅い川床のゴーロに行く。「北海道＝熊」というイメージがあって、どうしても周りに気を配りながら（脅えながら）行くようになってしまう。もっともこの沢は、積丹の中では比較的ポピュラーな沢と聞いているのでその心配はないのかもしれない。「安心を買う」という意味で熊撃退スプレーなるものを持参しているのだ！ゴーロの川床にあきた頃、突如12～13mのスタレ状の滝が現れる。右壁をアンザイレンして直登する。流れが細くなり、10m程の階段状の壁（伏流となっており水流はない）を通過してしばらく行くと、広大な斜面のお花畑に出た。遡行してきた伊佐内川の流れが見渡せ、その先に日本海が望まれた。かなり浅い沢である。しばし休憩の後、再び今度は猛烈な藪漕ぎをして頂上直下の登山道に出る。そこから積丹頂上まではほんの一投足であった。奇しくもガスの中で展望はなかった。登山道をかけ下り、のどかな放牧場の横を通り過ぎて登山口バス停へ。下界は晴れており、ふり上げば頂上付近のみが雲の中であった。熊スプレーはとうとう使わなかったなどと、うだうだしながらバスを待つが仲々来ないので国道を歩いて車の所まで戻った。（上野 記）

9 1 2 1 北海道 定山溪 白水沢～無意根山

9/24 (晴れ-曇り) 上野

昨日、吉田氏は帰京してしまったが、北海道に来たついでにもう一本沢をということで定山溪の白水沢をやることにした。

昨晩は西入氏のお宅に泊めてもらい、またもや愛車をお借りして無意根山登山口まで行き、暫く林道を歩いた所で沢に降りる。川床の広い中をしばらく行くと、瀬に行く手を阻まれる。瀬の先は2m程の滝となっており、流心通過は不可能である。右岸にロープが垂れており、ジクジクの急な草付き壁を登ってトラバース気味に高巻く。その後も程よいアクセントで快適な滝が続き、締めは高さ20~25mの階段状の滝である。赤茶けた岩盤にキラキラ光る流れの中を登って行く。単独遡行は心細いのか、どうしても先を急ぐようになってしまう。二股に着いて、昼食もそこそこに右股に入り、源頭の篠竹の藪をかきわけて登山道へ出る。待望の無意根頂上もまたガスであった。

遙々来た北海道も今夜の飛行機で帰京すると思うと少し淋しかった。 (上野 記)

9 1 2 8 ハヶ岳 天狗尾根

12/7~8 上野・高橋

12/7 (曇り)

早朝に東京を車で発ち、美し森の林道入口付近に車を停めて歩き出す。出合小屋から赤岳沢に少し入り、右岸の尾根に取り付く。赤布があり、取りつきは明快だ。微かな踏跡を頼りにぐんぐん高度をかせぐと、あっけなく尾根上に出る。一休みの後、尾根を忠実に辿る。殆ど樹林帯なので展望はあまり得られない。森林限界付近の、岩盤が露出している所に僅かなスペースを得てビバークする。水は2人で2ℓ弱、しかも夕食は生ラーメン。明日のことを考え、非常にしょっぱい、ネトネトしたラーメンだった。

12/8 (ガス-曇り)

水が限られており、喉がカラカラである。あいにく今日は天気が悪そうであり、喉が渇きそうもなく安心である。どんよりとした曇り空で、ガスが出てきた。大天狗の岩峰は正面にややかぶり気味にルートがとれるようであるが、すぐ右手を見ると踏跡がついている。大天狗という名称岩峰でなければ、自然と右手の巻道に行ってしまうような程だ。大天狗岩峰は、一見、階段状で易しそうに見えるが、取り付きまで行ってみると、逆層岩でかぶっておりザイルが必要である。ガスっていて展望が無く高度感が味わえないのと、寒いのと、また“登ろうと思えば登れる”という変な自負心から巻いちゃえ。ということで巻いてしまった。あー、情け無い。暫くの岩稜歩きで、ガスの中の縦走路に出た。主稜線は風が強く、しかも大ガス状態である。赤岳へ行くこともOmitして、すぐさま真教寺尾根をかけ下った。下界は曇りであり、真教寺尾根末端の、とってつけたような緩いスロープの清里スキー場の中を歩きながら「こんなスキー場で滑って楽しいのかな」と思った。(上野 記)

キリマンジャロ・・昨年来、浮かんでは消え、消えては浮かんだ登頂の夢。アフリカの大草原が見たい、野生動物が見たい。

タンザニアの乾季は12月から2月と、7月から8月。目標を正月と決め、幾つもある登頂ツアーの中から、費用・日数の合うものを選択した。準備は夏の富士登山に始まり、秋のランニングへと続けた。最高点への登頂率は30%という。道程はしごくやさしいが、6000mの高所が難関、“人事を尽くして天命を待つ”心境での出発となった。相棒は、元同僚で山仲間の仲野さん。彼は66歳、オヤジと同じ年齢ということになる。また、偶然にも30期の岡田が同じツアーに入っていた、のには驚いた。

12/27 狭く薄汚れた感じのアエロフロート機は、15:00 雨の名古屋空港を飛び立った。ナイロビまでのチャーター便、ソ連邦崩壊のさなかだけに、果たして目的地に着くのか不安の出発となる。極寒のハバロフスクを經由して、10時間後にモスクワ。薄暗い静かな空港内からは、外の世界は伝わってこない。2時間の給油のほが、6時間待っての出発となる。

12/28 夜が明ける。外には砂漠地帯が広がっている。荒涼とした景色、むきだしの地層、中東のどこからしい。南イエメンのアデンで給油。防寒具に身を固めた我々に、28度の外気が押し寄せる。真っ青なアデン湾を越えるとアフリカ。ついにアフリカの大地を眼下にする。茫漠たる大地、エチオピアの高原地帯、大地溝帯に走る大断層、むきだしの火山列。見飽きることのない景色が展開していく。

我々を乗せた飛行機は、積雲を突き抜けて、ナイロビ空港に降下していく。緑の草原にぽっかり浮かんだダウNTアウンが見えてくる 14:20。空港で出迎えの人々、空港職員、税関、すべてブラックアフリカン。はるか日本からワープしてきたような、不思議な気持ち。入国手続きもあっさり終える。しかしここでハプニング。ツアー仲間の荷物が3つ出てこない。アエロフロート機内でも手荷物に気をつけろという話だったが、どうもモスクワで抜かれたらしい。かの仲野さんもその1人、気の毒なことになった。

現地エージェンT手配のバスは、まがりなりにも舗装された道をかなりのスピードでぶっとばす。後ろの座席は嵐のようだ。果てしなく広がる草原、アカシアの木がアフリカを演出する。あっキリン、あっシマウマ、あっダチョウ、あっガゼル、こんな調子で動物が見える。ここはサファリパークではない。ちょっと感激する。そして背筋をびっと伸ばして悠然と歩くマサイ族の人達。巻きつけた原色の布がハッとする鮮やかさ、そしてこの赤い大地にマッチしている。この日はひたすら南下し、タンザニ

アとの国境を越え、キリマンジャロの麓の町モシまで。ホテルに入ったのは23:15、さすがに疲れた。

12/29 快晴の空、町のむこうにキリマンジャロが雄大な姿を見せた。登山口のマラングまでは、車で2時間余り。マイクロバスは、タンザニアの田舎町・丘陵を抜けて行く。土壁の民家、牛を追う子供達、川での洗濯。アフリカ人は皆、陽気で愛くるしい。手を振ると「ジャンボ（こんにちわ）」と応えてくれる。仲野さんも、子供になったように、沿道の子供に手を振る。

登山口はガイドとポーターでゴッタがえしていた。キリマンジャロ登山は、ガイドとポーターを雇うことが義務づけられており、我々は身の回り品だけしょっていけばよい。食事もすべておまかせの大名登山である。要所に小屋があり、4泊5日の行程がバックされている。

14:00 出発。ツアー客30名余、ガイド・ポーター含めた総勢は50名を越えただろう。道は広く緩い。しばらくは熱帯雨林を思わせるジャングル地帯である。行き交う人は誰彼となく「ジャンボ」と声をかける。中には「コンニチワ」「ガンバーレ」というポーターもいるのはご愛嬌。3時間ほどで最初の泊まり場マンダラハット(2700m)に着く。今日スタートするパーティーは、登頂日が1月1日になるというわけで、遅く着いた我々は満員で小屋に入れず、テント泊まりとなる。キッチンボーイの作る夕食は、スープにはじまり、パン、タマゴ・肉料理にいたるフルコース。予想以上にうまい。

12/30 朝 3:30 に目覚める。下弦の月が照らす中、初めて南十字星を確認する。南半球を実感、ちなみにここは南緯3度である。今日も快晴、さわやかなスタート。しばらく樹林帯を登ると、広大な草原帯にでる。珍しい花、樹木、よく見るとカメレオンまでいた。写真を撮りながらの散歩道。ただただ「ポレポレ（ゆっくり）」。キリマンジャロ主峰が姿を見せ、いやがうえでも気持ちが高まる。約6時間かかって、2日目の泊まり場；ホロンボハット(3700m)に到着14:00。ついに富士山の高度に至る。ここからいよいよ高度との戦いになるのだ。雄大な日没。スポッと真っすぐ陽が沈んで行く。それと入れ替わりに満天の星空。北天低いカシオペア、横倒しのオリオン座、雲と見間違ふような大小マゼラン星雲、宝石箱と石炭袋と南十字星、西天に立ちのぼる黄道光、はるか眼下のモシの町明かり。ひとつひとつ確認して、感無量の思いにひたる。これだけでも来た価値はあったなとしみじみ思うのだった。

12/31 今日も快晴。いよいよ未知の高さに入り込んで行く。先頭は早い、我々はマイペースをこころがけることにして、最後尾から行く。高山病の予防は、ひたすらゆっくり歩くことと水をガブガブ飲むことぐらい。登頂の可否は、いかに体力を温存し、明日の体調を保つかにかかっているのだ。間もなく最後の水場になり、半砂漠地帯に変わっていく。草もなくなり、いよいよ高山の気配がただよってくる。容

赦なく照りつける陽を受け、じっと我慢の気持ちでとぼとぼ歩く。寄生火山を回り込み、岩レキ地帯になると最後の小屋が見えてくる。既に4500mを越え、高山病の症状が現れる。頭がキーンと痛く、やや息苦しい。キボハット(4700m)。小屋脇の日だまりに座り込む。同行の女性軍はなぜか元気で、これから順応のため少し歩いてくるという。下界では負けないと思うものの、動けぬ自分が何とも情けない。夕食はパンとスープをむりやり口にするが、はきそうになる。日没とともにテントに横になる。ここの小屋の施設は狭く、ポーター達は外でシートにくるまるだけだ。

1/1 12:15 起床である。頭痛は周期的にやってくるが、ひどいほどでもない。ガイドが紅茶とビスケットを配ってくれる。気温は -10°C 程か。防寒具に身を固めてテントを出る。いよいよという気分が盛り上がる。パーティの点呼で体調の悪い3人はここで脱落とのこと。1:00 スタート。他のパーティも続々と出発していく。ガイドが10人に1人の割合で間に入る。ランプや懐中電灯の列が動き出す。しばらく緩い坂が続くが、2時間程でグズグズな砂礫の急登になってくる。このへんでパーティーも崩れだす。トップにつくのはやめて、後方に回る。20歩、歩いては息をつく苦しい登行。ランプの明かりが、遥か下方から空まで、点々と揺れている。頭上には天の川と南十字星が横たわっている。ガイドが思い出したように叫んだ。「Happy New year!」。そう新年なのだ。

5:00すぎ、東の空が白みだし、やがて真っ赤に染まっていく。ピナツボ火山の影響か、その鮮やかさはすごい。先頭に追いつくとともに、太陽が顔を出す。初日の出。何という幸運。ポーとした頭に92年の到来を実感する。更に1時間。急な岩場を越えていくと、そこが頂上クレーターの一角；ギルマンズポイントだった 6:50。階段状の頂上氷河が初めて見えた。ガイドや仲野さんと記念写真を撮る。見渡せば、下界そして雲海もはるか下である。多くの人がここをピークとみなして引き返すが、最高点は更に、火口縁を回りこんだ先にある。頭は相変わらず重い、ここで止める手はない。チーフガイドについて8人で出発する。雪のついた岩稜をトラバース気味に巻いていく。しばらくで緩やかな稜線になる。ガイドのペースは早く、ついていくのがやっと。息苦しさも最高調で、サバイバルゲームの様相を呈する。仲野さんは残念ながら途中で断念する。左手にバウムクーヘンのような氷河をみるようになると、頂上ピークが見えてくる。

「ついた～！、ウフルピーク」、「アサンテ サナ(どうもありがとう)」。ここまで連れて来てくれたガイド；マサナと感激の握手。独立宣言のレリーフ、タンザニアの国旗がはためく。まさしくそこが、アフリカ大陸の最高点であった。しっかり石を拾い、持参のフィアンセの写真を手写真におさめた。

あとは下るのみというわけだが、なんでもないので転ぶ。ヒマラヤの高峰でも下山時の遭難が多いが、こんなことなんだろうと思う。やっとの思いでギルマンズPに戻

る。ひたすら眠くけだるい。しばらく休憩後、下り始める。数百m下っては、座り込む。そしてとうとう。はっとして目が醒め、また走り下っては座り込む。この繰り返した。昼前にテント場に着く。何もする気がせず、力も入らない。目の前が曇っていると思ったら、目もやられたようで、あわててサングラスをかける。2時間も横になっていたのだろうか、ようやく動く気になった。今日はとにかく3700mまで下るのが得策。よろよろと出発。頂上は雲に隠れ、冷たい風が砂塵をまきあげる。精根尽きて、ホロンボハット着 16:30。長い1日が終わった。

1/2 すれちがうポーター達とも、すっかり慣れた。2日かけて登った道も足取り軽くかけ下る。ゲートでは、登頂証明を発行してもらい、世話になったポーターにTシャツをプレゼント。折からのスコールが降る中、キリマンジャロに別れを告げる。「トウタオナナ（また、会いましょう）」。

アリュウシャ郊外のホテルへ。周囲はコーヒーのプランテーションがひろがっている。ひさしぶりの豪華な食事。めいっぱい口にするも、腹をこわすはめとなる。

1/3 国境ナマンガ。マサイ達が盛んに物を売りつけにくる。べらぼうに高いはずだが気のいい日本人は買ってしまふのだ。午後ナイロビ着。夕方の町を散歩する。近代的なビル群、道端で物乞いする子供、華やかなマラヤさん（売春婦）、背広姿のサラリーマン、かっぱらいを目撃する。混然とした何かドキドキする町。陽が沈むと急に暗くなる。黒人たちは闇に紛れこんでいく。夜の街はとても歩けない。

1/4-5 早朝の空港へ。またもやグループの3人の荷物が、何者かに運び去られる。最初ケチがついて、さいごにオチがついた。添乗員が1人残るはめとなる。中東・トルコ・黒海を越えて、モスクワ経由名古屋へ。途中トラブルもなく、翌朝、富士山を認める。ああ日本。夢のような10日間がこうして終わった。

あこがれのアフリカ大陸。この山旅でその存在は遠いものではなくなった。茫漠たる大地と風。そこに生きるマサイ。汗するポーター達の笑顔と体臭。すばらしいとかうつくしいとかいう以前の、存在そのもののアフリカ。ちょっとかじっただけでは計り知れない。ここの旅には、それに向かい合う、大いなるバイタリティーとポレポーレ精神こそふさわしい。キリマンジャロ登頂という初期の目的は達したものの、また出直してこいと言われているような気がしている。

9 1 3 6 谷川連峰 白毛門山～宝川温泉スキーツアー

3/31 (快晴) 青谷・上野

前夜、車で土合駅前まで入り仮眠をした。湯檜曾川出合から登山道を行き、3P程で白毛門山頂上到着。平日で、しかも快晴である。振り返ると、今登ってきた急登の尾根の向こうに谷川本峰が対峙しており、太陽に照らされて光輝いている。こんなに谷川の全面を見渡せるのはめずらしい。山頂からはスキーを履いて尾根上を滑って行く。ある程度の所で見切りをつけて宝川方面に滑り込んで行く。宝川本流は雪が切れており、渡渉するハメとなる。雪面を登ってしばらくして宝川温泉からの林道の末端に出た。

このツアーコースは、この林道の末端を狙って宝川を渡れるように稜線から下りてこれるかがPointとなる。(上野 記)



'92.1.1. キリマンジャロ山頂

9 2 0 1 守門岳スキーツアー

4 / 1 1 ~ 1 2 上野・額賀 他1名

4 / 1 1 (曇り)

今日は額賀のワングル仲間の井戸川君と3人の山行である。車を小出インターで下り、只見方面へ向かい、入広瀬より民家の間を抜けて田小屋という集落の先の、農道が雪で埋もれ行き止まりの所で車を棄ててスキーを履いて歩き出す。2 P程行った所の藤平山西面の急斜面下あたりで幕営する。

4 / 1 2 (曇り-晴れ)

朝からいきなりものすごい急斜面をスキーを担いで、木登りよろしく稜線へ這い出る。でた所は藤平山の直下だった。薄いガスの中をスキーを滑らせてゆく。10時を過ぎる頃、日が射し始め、ガスも消えかけてきた。いきなりの大展望に歓声が出る。視界が得られたのを機にハイピッチでとぼして守門山頂に到着。東面は物凄いナイフエッジとなっており袴腰へと続いている。その遙か先に浅草岳が望まれた。下りはもと来た道に戻るのであるが、西面の本高地沢沿いには雪がびっしり付いて非常に快適そうであり、今にも滑り込んでゆきたい衝動にかられた。藤平山まで滑り込み、そこから急斜面を転げ落ちて、テントを撤収して車の所まで一気に滑り下りた。

守門岳からの稜線は案外ヤせており、ダイナミックな滑りは期待出来ないが、スキーの威力は充分に感じられた。(上野 記)



1992年度山行記録

1992年度役員

会長	山野 裕
チーフ・リーダー	上野午良 青谷知己
学生リーダー	額賀淑郎
西高係	緒方敬士 内田寛人
会計	上野午良
記録・会報	渡辺喜仁 内倉昌治
装備	額賀淑郎
都岳連	青谷知己

9 2 1 0 南ア 野呂川小太郎沢

8/15～16 上野・高橋・清野

8/15 (晴れ)

信大生である清野君参加ということで、場所的にも東京と伊那の中間に位置する南アの沢ということになった。中でも、野呂川右岸に注ぐ沢は、あの北岳の肩先に恥ずかしそうに鎮座する小太郎山につきあけており、魅力的な沢が数多くある。その中で、比較的ポピュラーと思われる、その名もズバリ小太郎沢にした。

3人3様、甲府で落ち合い、広河原へ向かう。林道歩きの後、小太郎沢出合で野呂川を渡り、沢に入る。始めは沢が広く荒れた溪相であり、沢のすそを行くがしばらくすると落ち着いてくる。滝も適度に現れ、結構楽しめる。1日ずつめあげることも可能であるが、北岳肩付近で泊となるので、早めに源流近くの二股で幕営する。

8/16 (快晴)

源流をつめあげ、ハイマツを漕ぐと、そこに小太郎山があった。前にも扇沢をつめてここに来たが、何度来ても良い所である。静かな山頂に未練を残しつつ、北岳下山の人の喧騒の中を下る。また行くよ、小太郎君！ (上野 記)

9 2 1 3 夏山合宿 北ア 滝谷クラック尾根

8 / 2 2 ~ 2 4 上野・額賀

8 / 2 2 (晴れ)

今年の合宿は、人数・各自の日程の都合で2人×2パーティーという何とも淋しいものになってしまった。

我々後発パーティーは、朝、渋滞の中央道を5時間かけて沢渡へ。そこからバスに乗り換えて上高地に入る。上高地からは4時間かかって、ヘトヘトになりながら涸沢の先発隊山田・高橋パーティーのテントに入る。

8 / 2 3 (晴れ)

先発パーティーは前穂北尾根に行き、我々は滝谷のクラック尾根へ。まずは北穂小屋までの登りがある。稜線へ出た時には、額賀は体調が悪く、暫く下降点で様子を見る。クラック尾根には1パーティー取り付いているのが見える。1時間程悩んだあげく、結局行くことにする。2人共、案外、主張を強く押し通す所がない方なのでいつも優柔不断になってしまう。B沢を下降して取り付きを間違えてしまい、際どい壁を2P程登って、本来ルート上の2P程上部に合流する。旧メガネのコルを越えて、難なくジャンケンクラックに達する。額賀トップで登るが、体調が悪いとは思えぬ程、スイスイと登ってゆく。上野の方はツルツルのフェースに手間取りながら登るが、ホールドが細かくどうしてもA0になってしまう。その後、リッジ・ガレ場・クラックとこなして、北穂小屋の真下に出る。登攀正味時間は2時間強であった。北穂山頂でビールの乾杯のあと、フラフラになりながら涸沢に帰幕する。

甘えもあるのかもしれないが、我々だけではどうしても判断が優柔になってしまいがちである。もっとびしびしリードして、時には非情なる行動までする巧者が一緒であったら精神的にも体力的にもおつりがくる程充実した山行となったであろうとも考えてしまう。

(上野 記)

9 2 1 6 苦土川大沢

1992. 10. 10~11 青谷 松本

旧友と久しぶりに沢に入る。深山ダム経由で林道終点にテントをはる。

最初の20m滝がポイントである。先行パーティーが苦戦しているのを見て、お互いに譲り合うが、扶養家族の少なさで青谷にトップを登ってもらう。中段の左へのトラバースがホールドがないために厳しい。ここから滝の連続で、白い滝と紅葉の赤と黄色のすばらしいコントラストの中をぐんぐん高度をあげる。二俣からナメ滝を連続して落ちて来る、左俣に入る。途中の50m二段の滝も、見た目ほど難しくなく越えることができる。詰めは大倉山の斜面ではっきりせず、30分程度笹藪をこぐ。

大峠から三斗小屋までの途中のブナ林は美しい紅葉が楽しめたが、三斗小屋で混雑を理由に温泉を断られたのにはがっかりした。小屋から宿までは非常に良い道で、MTBでおりるとおもしろそう。(松本記)



93. 1. 15~16 青谷、上野

早朝練馬を出発するも、渋滞がひどく、一般道を経由して長野に入ったのは昼を過ぎていた。人気のないキャンプ場に車を止め、しんと降る雪の中を一不動めざしてスキーをすべらせる。埋もれた沢筋に快調に進む。そろそろ不動の滝とおぼしきころ、正面にスラブ滝が見えてきた。左手から小沢が入る（実はこの左の沢が本流で不動の滝はすぐ上にあつた）。不動の滝は右岸を巻くことになっているのだが、このスラブ滝こそ、その滝と疑わない我々は、雪もついて登れそうなため、正面突破をはかることにする。途中アイゼンにはきかえ、ザイルも出してスキーをひきあげる。さああとはコルまでチョイチョイと、沢筋にラッセルを続けていく。しかし、緩くなるはずの斜面は、角度を増し、周囲も暮れて視界が閉ざされて行く……。

というわけで、まちがいにやるときずいた2人は、懐電たよりに急斜面を駆け下り、滝上より右岸の尾根を越え、斜面をトラバースしてようやくにして一不動の小屋にたどり着いたのでした。時間は8時半。さすがに精根尽きてしまった。

翌日、外は雪模様で回復のきざしもない。小屋は思いの外快適だったが、もう一泊して高妻山を目指す気はなくなっていた。昼前に、スキーをつけて下山する。不動の滝も簡単に巻ける。昨日のトレースは、何事もなかったように掻き消えていた。このままで帰るのはシャクなので、スキー場で少し滑り、うまいソバを食ってから帰京した。

5月連休に、想いがけず、再訪することになった。そのときは、下のキャンプ場にテントを張って、1日で往復した。残雪は豊富で、それを利して一不動まで2時間、高妻山まで更に2時間半だった。残雪に輝く、ピラミダルな高妻山は、名山の名に恥じないすばらしさがあった。この時、1月のまちがいルートを確認したが、上部は広大なスラブ壁となっており、まったくとんでもないところを登っていたものだ、と冷や汗がでた。

この周辺で山スキーを楽しむとすれば、やはり3月以降、ルートも直接五地蔵岳につきあげる尾根にとるのが正解であろう。ただ、高妻山に至る尾根は、上り下りも多く、山頂直下はすごい急斜面になっているので、登頂手段としての山スキーは、有効とは言えないようである。

9 2 2 3 安達太良山スキーツアー

3 / 2 3 (曇り) 上野・額賀

夜中に車で、安達太良スキー場の駐車場に入り仮眠をした。朝になったら、ちゃっかり駐車料金を取られてしまった。

ゴンドラの新設で安達太良は便利になったと聞いていたが、これ程あっけなく、しかも楽をして山頂に着けるとは思ってもみなかった。何せ、ゴンドラ終点から小1時間で山頂なのだから。これでは、山スキーでの山頂往復は半日あれば十分である。下山のスキーはくろがね小屋方面の台地状の尾根を滑ってスキー場下部で合流したが、それでも物足りなかったので、スキー場で2本程滑って帰ってきた。(上野 記)



1990年度

山行名	期日	場所	3年	2年	1年	教員	西朋
新人生歓迎山行	4/22	川苔山	2	4	2	4	中村 高橋 栗原
5月月例山行	5/12~13	雲取山~石尾根	2	4	2	2	栗原 清水
6月月例山行	6/30~7/1	丹沢 表尾根~蛭ヶ岳	0	4	2	2	栗原 緒方
夏山合宿	7/22~30	北ア 白馬岳~爺方岳	1	3	1	1	緒方 清野
沢登り	9/8~9	奥多摩 水根沢	0	4	2	-	高橋 緒方
11月月例山行	11/24~25	上越国境 平標山	0	2	1	-	内倉 緒方
スキー合宿	12/25~30	妙高 池ノ平スキー場	0	2	2	-	栗原
1月月例山行	1/12~13	上信国境 四阿山	0	2	2	-	内倉 中村
2月月例山行	2/23~24	日光 男体山	0	2	1	-	内倉 高橋
春山合宿	3/26~4/1	八ヶ岳中部 天橋 龍橋	0	2	1	-	内倉 高橋 清水

1991年度

山行名	期日	場所	3年	2年	1年	教員	西朋
新人生歓迎山行	4/28	三項山	2	2	4	4	博多
5月月例山行	6/8~9	丹沢表尾根~丹沢山	0	2	5	3	内田 松居
6月月例山行	6/29~30	奥多摩 雲取山	0	2	6	3	栗原 清水
夏山合宿	7/21~27	茶師岳~雲ノ平~笠ヶ岳	0	2	6	3	高橋 緒方 松居
沢登り	9/14~15	上越 巻機山 米子沢	0	2	4	-	上野 額賀 高橋
11月月例山行	11/2~4	南アルプス 鳳凰三山	0	2	4	1	内田 松居
スキー合宿	12/26~30	アサマ2000パーク	0	2	4	-	緒方 内倉
1月月例山行	2/8~9	四阿山	0	1	4	-	高橋 内田
2月月例山行	2/29~3/1	那須・茶臼岳	0	1	4	2	高橋 清水
春山合宿	3/25~31	南ア 光岳~上河内岳	2	4	4	4	緒方 栗原 博多

1992年度

山行名	期日	場所	3年	2年	1年	教員	西期
新人生歓迎山行	4/26	御前山	0	4	7	5	藤 野 朝 藤 野
5月月例山行	6/6~7	乾徳山~黒金山	0	4	8	3	栗原 内田
6月月例山行	6/27~28	丹沢山~檜洞丸	0	4	8	3	笠原 緒方
夏山合宿	7/21~27	碓氷岳~立山・剣岳	0	4	8	3	博多 清野
沢登り	9/12~13	奥秩父笛吹川東沢	0	4	7	—	高橋 博多 青山
11月月例山行	11/21~23	会津駒ヶ岳	0	4	6	1	緒方 栗原
スキー合宿	12/26~30	黒姫高原スキー場	0	4	8	—	清野 博多
1月月例山行	1/30~31	男体山	0	4	6	—	緒方 清野
2月月例山行	2/20~21	平標山	0	4	7	—	高橋 内田
春山合宿	3/26~30	早川尾根	0	4	4	—	博多 清野

西朋登高会会則

第1章 名称・目的

第1条 本会は「西朋登高会」と称する。

第2条 本会はスポーツ精神を遵守し、会員相互の登山活動を協力して実戦すると共に、西高ワンダーフォーゲル部の指導にあたる。

第3条 本会の事務局は、毎年、総会において定める。

第2章 組織・会員

第4条 本会の会員は、西高ワンダーフォーゲル部に在籍したもの、または有志で、総会で承認を受けたものにより構成する。

第5条 本会には次の役員をおく。

1. 会長..... 会を代表し、事務局をおく。
2. チーフリーダー.. 山行全体を掌握する。
3. 学生リーダー.... 学生を中心とした山行を掌握する。
4. 会計..... 財政を管理する。
5. 装備..... 共同装備を管理する。
6. 記録..... 山行記録をまとめ、会報および西朋通信を発行する。
7. 西高係..... 西高ワンダーフォーゲル部を指導する。

第6条 前条の役員のうち、会長は総会にて選出し、他の役員は会長が指名する。

第7条 本会は4月に、会長が召集して総会を開く。

第8条 総会では、次のことを議事とする。

1. 前年度活動報告
2. 前年度会計報告
3. 新年度役員選出
4. 新年度活動計画
5. 新年度予算案
6. 新会員承認
7. 会の運営に必要な事項

第9条 本会は原則として毎月1会、チーフリーダーが召集して例会を開く。

第10条 例会では、次のことを議事とする。

1. 山行報告
2. 山行計画
3. 会の運営に必要な事項

第11条 本会は年1回、会員相互の親睦を図るため、西朋祭を行う。

第12条 本会には次の会員を置く。

1. 特別会員...西高ワンダーフォーゲル部の顧問を勤め、本会に大いに貢献した先生
2. 一般会員...会の活動に関心を持ち、合宿山行や、総会例会西朋祭などに参加する会員。(会報、西朋通信などを事務局より送付する)
3. OB 会員...現在は会の活動から遠ざかっているが、総会や西朋祭に参加できる会員。(総会などの連絡のみ事務局より送付する)

第13条 前条のOB 会員について、次の場合、一般会員より移行する。

1. 本人の希望による。
2. 5年以上連絡がない人は、総会での協議により、OB 会員とする。後に本人の希望により、一般会員に戻ることができる。

第3章 会費・会計

第14条 本会の運営のため、次のとおり会費を徴収する。

1. 一般会員...年額4000円
2. OB 会員...年額1000円(数年分前納できる)

第15条 一般会員のうち、合宿山行などに積極的に参加する会員からは、装備費を別途徴収する。

第16条 会計年度は、4月から翌年3月までとする。

第17条 会計は、普通会計と特別会計に分ける。

第18条 普通会計は、会費収入をあて、装備・会報発行・通信事務などに使う。

第19条 特別会計は、西高ワンダーフォーゲル部指導謝礼金および会費収入よりの積立金および寄付金をあて、遭難対策基金とする。

第4章 山行

第20条 本会は、次の合宿山行を持つ。

1. 新人合宿
2. 夏山合宿
3. 冬山合宿

第21条 会員は合宿山行の他に、各人の目的に応じて、個人山行を行う。

第22条 山行に前もって、計画をチーフリーダーに知らせる。

第23条 山行計画には、次のことを明記する。

1. 行程
2. 同行者
3. 最終下山予定日
4. 緊急連絡先
5. その他

第24条 山行後、山行報告を記録係に提出する。

第5章 西高ワンダーフォーゲル部の指導

第25条 本会は、西高ワンダーフォーゲル部が安全かつ意欲的な活動を実践できるよう、部の顧問教諭と協力して指導にあたる。

第26条 西高係は、顧問教諭およびワンダーフォーゲル部員と密接な連絡をとる。

第6章 装備

第27条 本会は共同装備を持ち、会員はこれを利用できる。

第28条 装備係は共同装備を管理する。

第29条 個人装備は各個人が負担する。

第7章 遭難対策

第30条 会員が遭難したときには、一致協力して救助に努力する。

第31条 積極的に山行している会員は、山岳保険に加入する。

第32条 山岳保険金の使途に関する権限は、本会が有する。

第33条 遭難が起きたときには、会に遭難対策本部を設置し、会長は必要な係を任命する。

第34条 遭難救助に要した経費は、山岳保険金をあて、不足分は当事者が負担する。

第35条 会の遭難対策基金は、当座必要な費用の立替に使う。

第8章 会則の修正・改正

第36条 この会則の修正や改正は、総会で議決する。

第9章 施行

第37条 この会則は、1986年8月30日の臨時総会で決定し、9月1日より施行する。

編集後記

前作につづき、発行が遅れたことをお詫びします。そして、原稿の大部分を書いていただいた青谷・上野両氏に感謝いたします。

西朋 2 5

1 9 9 4 年 1 0 月 発 行

発行者 西朋登高会（会長 山野 裕）

発行所 横浜市緑区桂台 1 - 1 0 - 2

山野 裕 付 西朋登高会

編集者 内倉 昌治

印刷所 （株）サナエ